農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）

―埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書―

中原・原遺跡

2003.3

上伊那地方事務所

伊那市教育委員会

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）

―埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書―

中原・原遺跡

2003.3

上伊那地方事務所

伊那市教育委員会

序

中原・原遺跡は二つとも伊那市大字手良沢岡地籍の西部一帯に広く展開し、付近は瀬沢川・沢岡川・八ツ手川の河岸段丘面に位置しています。

鳥居龍蔵博士は大正末年頃に、手良地方を訪れ、当地からの出土遺物をつぶさに実見、調査され、大著『失史及原史時代の上伊那』を出版されました。この書籍の中で手良地方に存在する遺跡の重要性を取り上げ書き綴っています。

今回の発掘調査の動機は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業「通称、竜東地区の農免道路」が実施されるとのことからでありました。手良地区ではこの事業は平成12年度から導入され、事業実施以前に下手良中原・大原・松太郎窪遺跡の発掘調査が実施され、それに伴って「和同開珎」が出土し、これにからめての「弓良郷（てらごう）」の存在性を強く示唆できるという大きな成果を得ることが出来ました。

今回は、このような成果を踏まえての発掘調査であったので、調査実施以前からの大きな期待感が持たれていたわけでありますが、実際に発掘調査をしてみると、当初程の成果は得られなかったが、一方、このことによって、古代の「弓良郷」の広がり範囲が集中的に把えられるようになりました。

この調査報告書刊行に当たり、長野県教育委員会、上伊那地方事務所、地元の方々をはじめ、直接的に、発掘調査に従事された発掘調査団長、調査員、従業員の皆様の御尽力の賜物であり、心より深く感謝を申し上げ、序のことばと致します。

平成15年２月25日

長野県伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

まえがき（中原・原遺跡の環境）

遺跡の位置

中原遺跡・原遺跡の二つは隣接している。長野県伊那市大字手良沢岡地籍内の八ツ手集落南西部一帯に連続的に、東から西に帯状を呈しながら展開している。原遺跡にいたっては西側は福島地籍に入り込んでいる。これら二つの遺跡の北端には瀬沢川・沢岡川（竜東に於ける天竜川の大きな支流の一つに数えられ、福島地籍の北側で天竜川と合流する。天竜川と合流する付近では瀬沢川と呼んでいる）が西流し、深くて、険しい河岸段丘を形成している。

これら両遺跡に到達するまでの道順を述べてみる。誰でもが、理解できるわかりやすい道順は凡そ二つの方向に限定されるであろう。第一の道順はＪＲ飯田線伊那北駅で下車して、天竜川に架かる二条橋を渡り、東に向かって進み、主要地方道伊那・辰野線（通称は竜東線と呼んでいる）を辰野方面へ4.5km程の距離を北進すると、道路の両側に野底集落が細長く点在し、その北はずれ、伊那北保育所近くの信号機のある四叉路を右折して、市道野底・手良線を東進する。進み始めて、すぐに棚沢川（地元では野底川と呼んでいる。手良の奥、野口蟹沢の山麓に源を発し、天竜川に合流する支流で、合流地点では天井川を呈している）を斜目に渡り、しば

位置図（１：75,000）
①中原遺跡　②原遺跡

らく、東へ進むと右手に溜池工法にて構築された「野底堤」が木々の間を通して見られ、夏ともなれば水を満々と湛えている。この堤から東へ500m程進むと三叉路につきあたる。ここで、進路を左に取り、急勾配の坂を登り、登り切った付近に舗装がきちんと整備された道路が南北にほぼ直線状に走っている。これが農免道路で、現在は途中で終わっている。この地点を左折して西の方へ市道を下って500m程行くと、右側に折れる狭い道路が東西に長くある。この入口付近は雑木林となっており、ここを通り抜けていくと、あたり周辺に水田、畑、果樹園が広がりをもっている一帯が中原遺跡であり、さらに西へ進み、南北に狭い農道が走っている。これの西側一帯が原遺跡の中心地となっている。

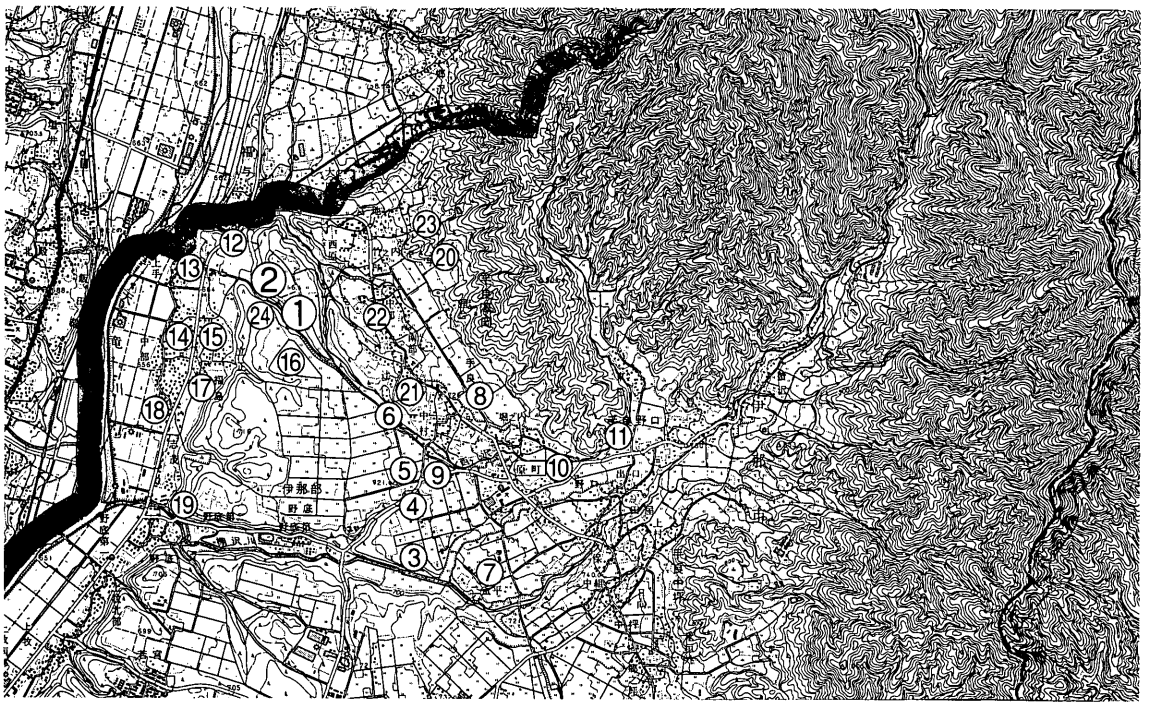
第二の道順はＪＲ飯田線北殿駅で下車し、天竜川を渡って1000m程東方へ進むと、天竜川低位段丘上面に南北に長く発達した集落の家並みが眼に鮮明に映る。これが福島集落であり、この道路と前述した主要地方道伊那・辰野線とが交差する所に福島神社境内のケヤキの大木が見える。福島神社近くの道路を東方へ500m程行き、左手手前の高台が原遺跡で、それに引き続いて東側に中原遺跡がある。

地形及び周辺の遺跡分布

１．地形・地質

中原遺跡・原遺跡の存在する地形は前述したように北側は八ツ手川・沢岡川・瀬沢川にそれぞれ面した状態になっているのが現状であり、部分的に細い支流が入り込みながら、西流して、最終的には天竜川に合流する。全般的にみて、遺跡地周辺は昭和40年代前半の圃場整備事業導入によって、近代化農業が押し進められて、乾田化の様相を呈している。農用地地域の土壌は耕土が厚く、肥沃であった。

地質については、これら二つの遺跡のある対岸に「辻西幅遺跡」があり、そう大差はないと想定されるので『辻西幅遺跡緊急発掘調査報告書』を参考にさせて頂き、それによれば次のように記されている。「手良地域の東部山地は領家変成岩帯の高遠花崗岩より成立している。この地域に分布している領家変成岩類は古生代及び中生代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域的な変成作用を受けて雲母片岩や黒雲母片麻岩に変化したのである。また、これらの変成岩は、中世代末から新生代、古第三紀にかけて貫入した高遠花崗岩によって接触変成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフエルス等を含む接触変成体を形成している。下手良中原・大原・松太郎窪遺跡は礫層の上に砂礫混合のテフラ層が堆積し、安定度は高かった。礫層を構成する種類は砂岩、粘板岩、緑色岩を主とする５～20cmの亜円礫で、風土の進化度は顕著であった。これらの礫は東方の山地に存在する領家帯の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東方の三峰川帯、秩父帯、四万十帯から運ばれてきたものであり、三峰川の扇状地礫層と想定される。」



中原・原遺跡周辺の地形及び遺跡分布図（１：50,000）

「砂層を構成する砂粒は黒雲母・石英・長石の他に磁鉄鉱、しそ輝石等が混入する。これらの鉱物は火山起源のものではなく、東方山地の領家帯の岩石を含んだ鉱物であり、主として沢岡川上流の東松方面から流氷によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の上部から下部にかけて姶良Tn火山灰（九州鹿児島湾の姶良カルデラから約25,000年前に飛来した火山灰。略称ＡＴ）の火山ガラスと形態が同じ火山ガラスがわずかではあるが含まれている。おそらく二次的に移動してきて混入したものと思われる。」

２．周辺遺跡の分布

本調査報告書で記述する中原・原遺跡の周辺一帯には現在、縄文時代早期から江戸時代に及ぶ各種各様な24カ所の遺跡が確認されているが、今後の調査によって増える可能性は十分にある。縄文時代早期から江戸時代に至るまでの時代的な幅を想定してみると、それは約１万年の数値に達し、この長期間にわたって人間の営みが連綿として続いていた確たる実証的な証拠である。

24カ所の遺跡については次頁に「周辺遺跡一覧表」としてまとめてある。この表に示した内容は遺跡名、所在地、地形、時期である。Noについては、「中原・原遺跡周辺の地形及び遺跡分布図」内に明示されている番号と一致させ、即座に「周辺遺跡一覧表」と照合出来るように配慮してある。時期については文化史的にみた時代と土器編年を併用してある。

中原遺跡・原遺跡周辺の遺跡発掘調査は過去、島崎遺跡（第１次～第２次）、堤林遺跡、山の田遺跡、鍛冶垣外遺跡、辻西幅遺跡（第１次～第２次）、下手良中原遺跡、大原遺跡、松太郎窪遺跡でそれぞれ実施され、それらの調査報告書が刊行されている。これらの遺跡発掘調査成果

については関連的に次に述べる歴史的環境のところで触れるのでここでは割愛しておくことにする。

前述した遺跡の分布状況を前頁で標示した遺跡分布図によって概観してみる。棚沢川・八ツ手川、沢岡川等々の大小河川によって形成された河岸段丘突端面に存在している場合が多く、山麓扇状地面上の遺跡存在度の係数は低い。この理由付けとしては先史地理学的、自然地理学的、歴史地理学的に見て、水便との関連性を強く示唆してくれるのである。

歴史的環境

伊那市東部地区の北部に位置している手良地域は天竜川と密接な関連があったとみえて、全般的に竜東地区と呼ばれており、手良地域の西端は天竜川左岸河岸段丘面上にある。

竜東における主要な支流の一つに棚沢川や三峰川があげられ、それらの活動によって形成された河岸段丘面を基盤にして、その上に東側山麓線上地帯より流出した多量の土砂、礫を堆積して広大な山麓扇状地面を造り出した。何回にもわたる扇状地の形造運動がくり返され、それの終了後に、厚いテフラ層が覆い、その上にさらに安定した土壌が堆積している。

八ツ手地籍に人間の足跡が開始されたのは現在、分かっている段階で、山の田遺跡出土の縄文早期楕円押型文土器(約8,000年前)が最古である。さらに、『山の田遺跡緊急発掘調査報告書』より同遺跡から出土し

No.	遺跡名	所在地	地形	時期
1	中原	手良八ツ手	段丘上	中島　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
2	原	〃	〃	曽利
3	下手良中原	手良沢岡	段丘上	奈良時代土師器　奈良時代須恵器　和同開珎
4	松太郎窪	〃	扇状地上	楕円押型文　曽利　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器
5	大原	〃	〃	奈良時代土師器　奈良時代須恵器　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
6	垣外	手良下手良	平地上	曽利
7	二重平	〃	段丘上	奈良時代土師器　奈良時代須恵器　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
8	角城	〃	台地上	平安時代須恵器
9	南垣外	〃	〃	〃
10	鍛冶垣外	手良野口	扇状地上	曽利　堀ノ内　中島　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器　平安時代須恵器　中世陶磁器類
11	古八幡	〃	山麓線上	中島
12	南原	福島	段丘上	曽利　堀ノ内　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器　平安時代須恵器
13	大上平	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
14	福島上平Ⅲ	〃	〃	〃
15	福島上平Ⅰ	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
16	池火平	〃	〃	曽利　中島　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
17	福島上平Ⅱ	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
18	福島上平Ⅳ	〃	〃	〃
19	福島古墳群	〃	〃	横穴式石室　円墳　8基
20	山の田	手良八ツ手	山麓線上	楕円押型文　鵜ヶ島台　子母口　梨久保　井戸尻　曽利　水神平Ⅱ　平安時代土師器　平安時代須恵器
21	辻西幅	手良沢岡	扇状地上	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
22	島崎	手良八ツ手	台地上	平出3A　井戸尻　曽利　中島式　内耳土器　中世陶磁器類　近世陶磁器類
23	堤林	〃	扇状地上	大洞A　樫王　平安時代土師器　永楽通宝　中世陶磁器類　近世陶磁器類
24	六ツ塚古墳	〃	段丘	横穴式石室　円墳1基

周辺遺跡一覧表

た土器類を列記すると次のようになる。縄文早期末葉で貝殻条痕文に主特徴を持つ南関東地方の鵜ケ島台式土器、子母口式土器、中央高地地方の縄文中期初頭の梨久保式土器、中期中葉の井戸尻式土器、中期後葉の曽利式土器などである。

時代は下って、弥生時代に入る。天竜川水系を遡って稲作農耕文化を波及させた水神平式土器文化が東海地方から伊那谷に浸透してくる。この文化はさらに北上して岡谷市庄の畑遺跡まで達している。この文化の存在を実証する貝殻条痕文系土器片が先辻した山の田遺跡から出土している。当時の水田は湿田形態が多く、沢水を集めて水田をこしらえたのであろう。この遺跡は標高が760m程あり、八ツ手集落より北端部に位置している。近年、問題になってきている弥生時代高地性集落の草分け的存在ではないだろうか。水田振興とともに畑作振興も盛んに行われていたと思われる。

さらに時代は下って、古墳時代に入り、八ツ手集落から瀬沢川・沢岡川・八ツ手川を隔てた南側には今回発掘調査をした中原遺跡の一部に円形状の六ツ塚古墳の残骸が1基見受けられ、古墳の名称からして、かつては、6基の存在性を裏付けてくれると同時に、古墳時代終末期の群集墳の展開を成していたと思われる。現在、八ツ手地籍内には六ツ塚古墳築造時と同じ頃、すなわち、古墳時代終末期（6世紀後半～7世紀前半）の集落址の存在は確認されていないが、近郷近在の古墳の分布状況からみて、近い将来、発見されると思われる。そのためにも隣接する福島遺跡との関連性を重要視しなければならない。

奈良時代集落址の存在は下手良中原遺跡・大原遺跡の発掘調査によって明らかになってきている。「弓良郷」の存在は平安時代中期頃になって初めて文献によって実証されているが、この古代の郷村は初源を探れば奈良時代まで遡れるわけであり、これの存在性を強く実証してくれるのに下手良中原遺跡第3号住居址出土の和同開珎があげられる。

平安時代中期頃の承平5年（935）に編纂された『倭名類聚鈔』には「弓良郷」なる名が最初に見られる。「弓良」なる名の由来については「弓良公」と称する帰化人が中坪の奥地「竜の沢川」上流に住んでいたと伝承されており、当地は「大百済毛」「小百済毛」と呼ばれている小字名が残っている。これについては諸説が提唱されているが、確たる説は出ていない。今後、歴史的な観点からみた総合的調査が是非とも必要であろう。

辻西幅遺跡より「王」なる字を墨書にして印した平安時代土師器坏・須恵器坏が竪穴住居址より出土している。王とは統率者の名であり、この墨書銘の内容からみて、「弓良郷」の存在性がクローズアップされるのである。南垣外遺跡から平安時代灰釉陶器長頸瓶と人骨の出土が伝えられている。辻西幅遺跡、南垣外遺跡はともに今回発掘調査した遺跡に近接している。南垣外遺跡から棚沢川に沿って広大な平坦面が展開し、この西端部がかの有名な福島遺跡である。近年の研究から福島遺跡、古代の笠原御牧をその範囲面から見て「弓良郷」に包含する説が提唱されつつ現状であるが、今後のさらなる研究が重大な課題となっている。

鍛冶垣外遺跡からも平安時代の遺構・遺物の検出が報告書によって分かるのである。

昭和60年度の発掘調査によって、堤林・島崎両遺跡から中世陶磁器類が相当量出土した。前者の遺跡より出土した遺物は次の通りである。古瀬戸灰釉四耳壺（15世紀）、古瀬戸鉄釉稜皿（16世紀前半）、永楽通宝（１枚）。後者の遺跡出土遺物は次の通りである。中津川大平鉢（13世紀）、中国元白磁碗（13世紀）、中国明白磁碗（15世紀）、中国明青磁碗（15世紀）、古瀬戸灰釉大盤（15世紀後半）、古瀬戸鉄釉摺鉢（16世紀前半）、古瀬戸灰釉皿（16世紀中葉）、古瀬戸灰釉丸皿（16世紀前半）、古瀬戸鉄釉甕（16世紀）

以上、出土遺物の実態より鎌倉時代前期から戦国時代にかけての約300年間、城館を中心にして、それを取り巻く農村集落の営みがある程度、確証づけられる。

中国青磁・白磁類は伯来の高級品で、その使用階層からみて、近くにある「小松の城」「登内の城」との結び付きを究明すべきであろう。一方、大平鉢、摺鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器類は中世農村集落の繁栄を物語ってくれるのである。遺物出土量、遺物内容の差によってそれぞれ、集落の栄枯盛衰の変遷が読み取れるのである。その支配の主流は位置的に見て美篤の笠原氏であったのか、箕輪町福与城の関連であった藤沢氏であるのか、今後の謎解きに興味をかきたてられる。

江戸時代に入り、手良地区は千村氏統治の「千村預り領」と呼ばれる天領に含まれていた。千村氏の代官屋敷は手良の地には無く、遠く、岐阜県可児市久々利にあり、現在、これは千村氏屋敷として史跡保存されている。以上の条件から察し、地域的に見て、久々利付近は一大窯業地帯を形成していたので千村氏を通じて陶磁器類が極めて容易に入手できたのであろう。したがって、島崎遺跡より多量の「瀬戸物」が出土し、このことを実証してくれる一つとなる。

次に島崎遺跡より出土した優品を記す。17世紀代では瀬戸鉄釉摺鉢、志野長石釉皿。18世紀代では瀬戸灰釉細筒形三足香炉、瀬戸御深井釉茶碗、瀬戸灰釉こね鉢、瀬戸灰釉碗。19世紀代では瀬戸鉄釉燈明受皿、瀬戸鉄釉茶碗、瀬戸染付茶碗、伊万里雪輪文茶碗、瀬戸灰釉香炉、志野長石絵瀬戸。これらの陶器類は明確に用途区分されていたことが分かり、以上のことから江戸時代全般を通しての農村集落の実態が把握できるのである。

大原遺跡の北側に近接して「下手良大日堂」が建てられ、これの入口に当たる東側には五輪塔群が並んでいる。これらは火輪の軒勾配、地輪の縦長状況の特徴から見て、江戸時代の建立と想定できえよう。

最後に『伊那市寺院誌』によれば「下手良大日堂」について次のように記してある。

一　宗　旨　　曹洞宗

二　本　寺　　澄心寺

三　本　尊

大日如来坐像（金剛界）（厨子入）

仏身高　43.0cm　　台座高　37.0cm（蓮華座）

光　背　金泥舟形

（飯塚政美）

例　言

１．本書は、平成14年度に実施した農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。

２．この緊急発掘調査は上伊那地方事務所長の委託により伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団（手良地区）を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。

３．本調査は、平成14年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

４．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美　　本田秀明

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図　　飯塚政美　　本田秀明

・土器拓影　　本田秀明

・石器・陶器実測図　　本田秀明

・金属器実測図　　本田秀明

◎写真撮影者

・発掘及び遺構　　飯塚政美

・遺　　物　　飯塚政美

５．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

６．出土遺物、遺構図面類及び遺物実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

中原遺跡

目　　次

目　　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……4
　第１節　発掘調査に至るまでの経緯……4
　第２節　発掘調査の組織……4
　第３節　発掘調査日誌……5

第Ⅱ章　発掘調査……8
　第１節　調査の概要……8
　第２節　遺構と遺物……8
　　(1)　中世の遺構と遺物……8
　　(2)　時期不詳の遺構……9
　　(3)　その他の遺物……10

第Ⅲ章　所　　見……11

挿　図　目　次

第１図　地形及び遺構配置図……(袋図)
第２図　第１号竪穴実測図……(８)
第３図　第２号竪穴実測図……(９)
第４図　石器実測図……(９)
第５図　鉄製品実測図……(９)
第６図　第１号柱穴群実測図……(９)
第７図　出土土器拓影……(10)
第８図　陶器実測図……(10)
第９図　石器実測図……(10)
第10図　金属器実測図……(10)

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
図版２　発掘調査状況
図版３　発掘調査状況
図版４　発掘調査状況及び遺構
図版５　遺　構
図版６　遺構及び遺物出土状況
図版７　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった中原遺跡は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成13年11月14日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事、伊那市教育委員会社会教育課職員、上伊那地方事務所土地改良課職員とで三者協議を実施する。

平成14年６月17日付けで、上伊那地方事務所長鈴木良知と伊那市長小坂樫男両者間で委託契約書を取り交わす。

平成14年６月19日付けで伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長御子柴泰正両者間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

平成14年11月21日付けで、中原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成14年11月21日付けで、中原遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出する。

平成14年11月21日付けで、中原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会教育長へ提出する。

平成14年12月19日付けで、上伊那地方事務所長鈴木良知と伊那市長小坂樫男両者間で変更委託契約書を締結する。

平成15年１月８日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長御子柴泰正とで埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書を締結する。

第２節　発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長	登内　孝
委員	上島武留
〃	伊藤晴夫
〃	田畑幸男
教育長	保科恭治
教育次長	伊藤　隆
事務局	塚本哲朗（生涯学習・スポーツ課長）
〃	布袋喜代子（生涯学習・スポーツ課長補佐　女性室長）

事　務　局　　白　鳥　今朝昭（生涯学習・スポーツ課長補佐　社会教育係長）
　〃　　飯　塚　政　美（生涯学習・スポーツ課主幹）
　〃　　山　口　千江美（生涯学習・スポーツ課主査）
　〃　　北　林　　太（　　〃　　）
　〃　　唐　澤　直　樹（　　〃　　）
　〃　　田　原　節　子（　　〃　　）

発掘調査団

団　　長　　御子柴　泰　正（長野県考古学会会員）
調　査　員　　飯　塚　政　美（日本考古学協会会員）
　〃　　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）
作　業　員　　城倉三成　織井和美　酒井公土郎　有賀秀子　那須野進　松下末春
　　小田切守正（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成14年６月21日（金）　伊那市考古資料館にて発掘機材、測量機材の点検、整備を実施して発掘調査に万全を期す。いわば発掘調査の準備をするかっこうとなった。

平成14年６月24日（月）　発掘現場へ発掘機材一式を運搬する。スペースハウス・コンテナハウスを建てる場所を選定し、その場所をバックフォーにて整地を行う。東側から第１号トレンチ、第２号トレンチを設定し、掘り始める。

平成14年６月28日（金）　第１号トレンチ、第２号トレンチを掘り進めていくと、落ち込みが確認されたが、調査の段階で後世の攪乱と判別できた。完全に掘りあげて、写真撮影を終える。

平成14年７月３日（水）　スペースハウス、コンテナハウスを建てた西側二枚目の水田に、東西に長くトレンチを入れる。これを第５号トレンチと命名して、掘り進める。

平成14年７月４日（木）　本日は真夏日を思わさせる程、暑い一日であった。昨日に引き続いて第５号トレンチを掘り上げる。道を隔てた北側に東西に長く第６号トレンチを設定し掘り始める。

平成14年７月５日（金）　第５号トレンチの写真撮影を終える。第６号トレンチを掘り進めると、南北に走る溝が検出され、掘り進める。

平成14年７月10日（水）　台風接近のため、大雨であった。半日かけて発掘器材の整備をする。

平成14年７月12日（金）　溝を掘り進めると、中よりかなり多量の砂の堆積が見られ、明らかに川筋の跡と判明した。自然現象によって成因したものであり、直接的には遺構と何ら関係はないが、全面的に掘り上げて、一応、記録するために清掃、写真撮影を終える。トレンチ掘りを西へ、西へと進めていく。

平成14年７月18日（木）　本遺跡地一帯を東西に走る舗装道路の北側、最西端の水田地帯へトレンチを入れて、掘り進めるが、何の遺構・遺物も検出されなかった。

平成14年７月24日（水）　第１号トレンチから第13号トレンチまでの全測図作成。第１号トレンチから第５号トレンチまでの埋め戻しを完了する。

平成14年７月25日（木）　第14号トレンチを設定して掘り進めると、東側に黒い落ち込みがみられ、その付近を拡張する。第10号トレンチを設定して掘り進める。

平成14年７月26日（金）　第６号トレンチ、第７号トレンチ、第８号トレンチを埋め戻し、第15号トレンチを掘り進める。

平成14年７月30日（火）　第15号トレンチを西側へ向かって掘り進めると、中世の内耳土器と天目茶碗が数片出土し、その周辺にわずかに焼土と炭化物が検出されたが、中世の遺構らしきものは確認できなかった。第16号トレンチを掘り進めると同時に第13号トレンチを埋め戻す。

発掘風景

発掘風景

平成14年８月５日（月）　第15号トレンチ、第16号トレンチの掘り下げを実施する。

平成14年８月６日（火）　前日と同様な作業を実施する。

平成14年８月７日（水）　第17号トレンチの掘り下げを実施する。

平成14年８月８日（木）　第18号トレンチを掘り進めると、方形の黒い落ち込みが見られ、それのプランを確認し、掘り下げていくと火打金が出土し、中世方形竪穴状遺構と判別できた。第10号トレンチの埋め戻しを完了する。

平成14年８月９日（金）　中世方形竪穴状遺構の二つの掘り下げを進め、精査する。第１号トレンチ、第２号トレンチの埋め戻しをする。

平成14年８月20日（火）　第１号竪穴、第２号竪穴の道路用地内にセクションベルトを残してほぼ掘り下げを完了する。第14号トレンチ、第17号トレンチの写真撮影、埋め戻しを完了する。

平成14年８月23日（金）　第14号トレンチ、第15号トレンチ、第16号トレンチ、第17号トレンチ、第18号トレンチ、第19号トレンチまでの全測図の作成。第16号トレンチの写真撮影終了。第19号トレンチを全掘し、写真撮影を終え、埋め戻しを完了する。

平成14年８月27日（火）　第15号トレンチ、第16号トレンチの写真撮影、埋め戻しの完了、第１号柱穴群の平面、断面実測。第９号トレンチの埋め戻し。第１号竪穴、第２号竪穴の平面、断面実測終了。第２号竪穴のセクション図完成。

平成14年８月29日（木）　第１号竪穴、第２号竪穴の清掃を実施して、写真撮影を終える。付近一帯の埋め戻しを完了する。道具の後片付け、洗浄を済ませて、発掘器材一式全てを伊那市考古資料館へ運搬する。本日をもって現場の発掘作業を完了する。

平成14年12月～平成15年２月　報告書の図面、図版作成、原稿執筆、編集を終えて、印刷所へ入れて、印刷を開始し、校正を行い、３月の報告書刊行に努力を払った。

平成15年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみた。　（飯塚政美）

第Ⅱ章　発掘調査

第１節　調査の概要

中原遺跡周辺一帯は水田、畑を中心にした典型的な田園風景を呈しながら、東西に長い広がりを持っている、これらに混じって、ほんのわずかに果樹園が見られる。このような状況下であるがために、後述する原遺跡同様に農振農用地区域内に設定され、手良地域の穀倉地帯の一端を担っている。

遺跡地の中心地は現市道の下になっており、今回の発掘調査は不可能であった。したがって、発掘調査実施部分は現市道の両側、つまり拡幅部分だけであった。発掘調査を実施する時点で次の事を考慮に入れて調査に取りかかった。それは水田造成時に移動した土の状態、つまり、ある部分が取り土の部分、あるいは埋土の部分かであった。

実際に、現地に重機を入れて調査に取り掛かってみると、現市道の南側の土量の移動は極めて少なく、ソフトテフラ上層面を掘り込んで、２基の中世方形竪穴状遺構が構築された。一方北側はソフトテフラ層の切り土面が多く、遺構検出への期待度は低かった。　　（飯塚政美）

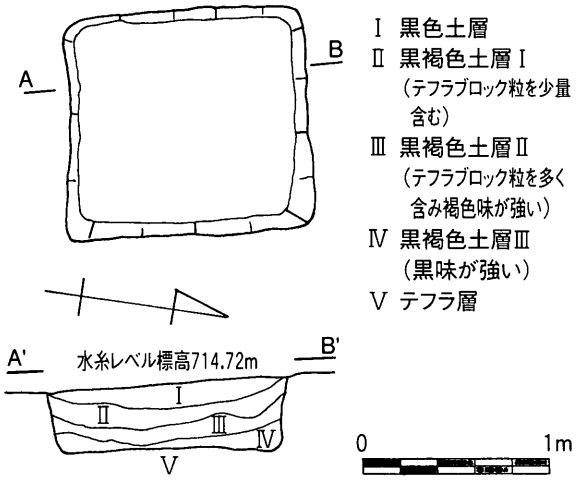
第２節　遺構と遺物

（１）中世の遺構と遺物

第１号竪穴（第２図　図版４）

本竪穴は今回、発掘調査を実施した地区では、最西端部に設定された第18号トレンチの南東端に、加えて北西に隣接して第２号竪穴が検出された。表土面より30cm程下層のソフトテフラ層を掘り込んで構築された竪穴で、平面プランは隅丸方形状を呈し、その規模は南北１m30cm程度、東西１m20cm程度を測定できる。

壁高は30cmから50cm程度と幅の広い数値を示し、その状態は外傾気味で、堅く、良好であった。床面は堅い叩き状を呈し、大般平坦で、良好であった。遺物は何も出土しなかったが、近接して検出された第２号竪穴に酷似しており、おそらく、中世に位置づけが可能と思われる。　　（本田秀明）



第２図　第１号竪穴実測図

第２号竪穴（第３図　図版５）

本竪穴の南東部に隣接して、第１号竪穴が検出された。したがって、本遺跡地での全体

的な位置づけは第１号竪穴の記述より分かる。

表土面より40cm程度下ったソフトテフラ層面を掘り込んで構築してあり、南北１m40cm程度、東西１m50cm程度の規模を有し、その平面プランは隅丸方形状を呈する。

壁高は50cm前後とやや高い数値を示し、その状態は内湾気味で、堅く、良好であった。床面は堅い叩きを呈し、ブロック的な凹凸を認める。

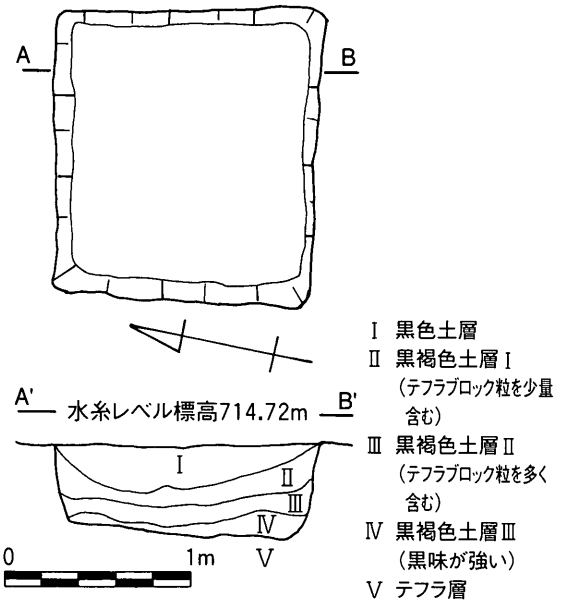
遺物は中世の火打石と火打金が出土している。

遺物（第４～５図　図版７）

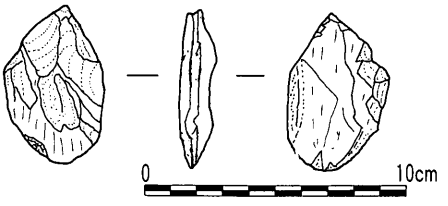
第４図は火打石であり、石質は長石で、良質なものであって、使用した痕跡が認められた。

第５図は鉄製の火打金である。腐植してしまっていて部分的に、欠損してはいるが、全般的に三角形状を成し、上端部の頂に方形状のつまみを持ち、それは板状を呈している。

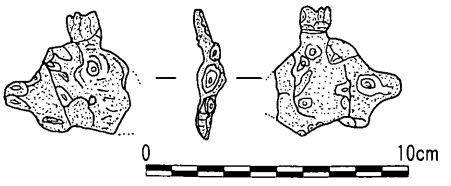
当然ながら、第４図の火打石と、第５図の火打金はセット的に使用されたのであり、同一の遺構から出土しても何も不思議ではなく、ごく当然である。



第３図　第２号竪穴実測図



第４図　石器実測図



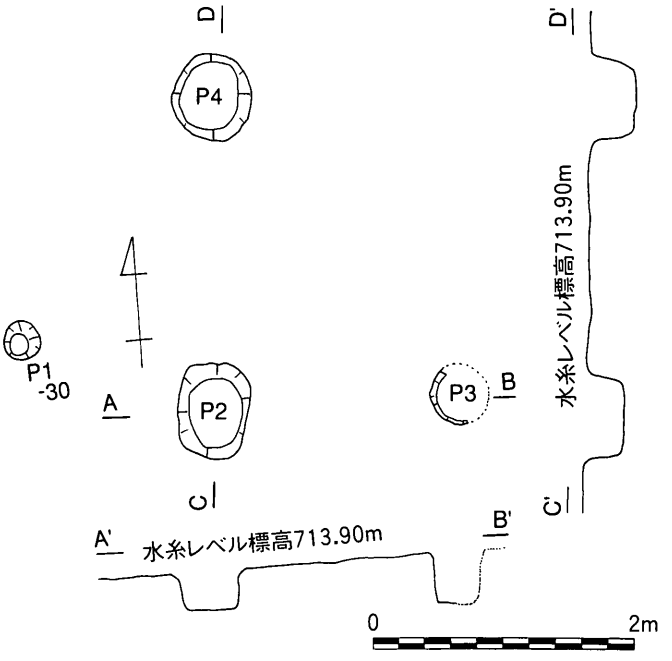
第５図　鉄製品実測図

（２）時期不詳の遺構

第１号柱穴群（第６図　図版６）

本柱穴群は第９号トレンチ内の中央部付近、表土面から40cm位下ったソフトテフラ層上面に検出された。発掘調査をする範囲が限定されているため、本遺構の全体像は全く掌握出来なかった。

検出されたＰ２（70cm×55cm、深さ30cm）、Ｐ４（65cm×62cm、深さ33cm）は、かなり、整然とした形で配列されており、何か倉庫的な遺構の存在を連想させるが、



第６図　第１号柱穴群実測図

遺物の出土は全くなく、時期決定が出来ないのが残念である。

（3）その他の遺物（第7～10図　図版7）

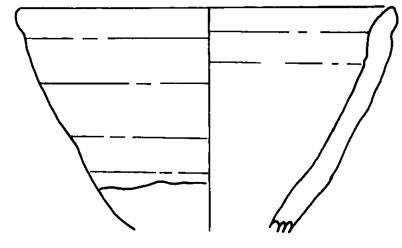
第7図（1～5）はトレンチ内より出土した土器片である。（1）は胎土中に少量の繊維を含み、外面全体にわたって無雑作に貝殻条痕文が走っている。茶褐色を呈し、焼成は良好である。縄文早期末葉の茅山上層式の一派と思われる。

（2～4）は赤褐色を呈し、同一個体の口縁部破片に含まれる。無文地に隆帯（3）を貼り付け、その間に沈線文を横走させている。縄文後期中葉の加曽利B式の一派に属すると思われる。

第7図　出土土器拓影

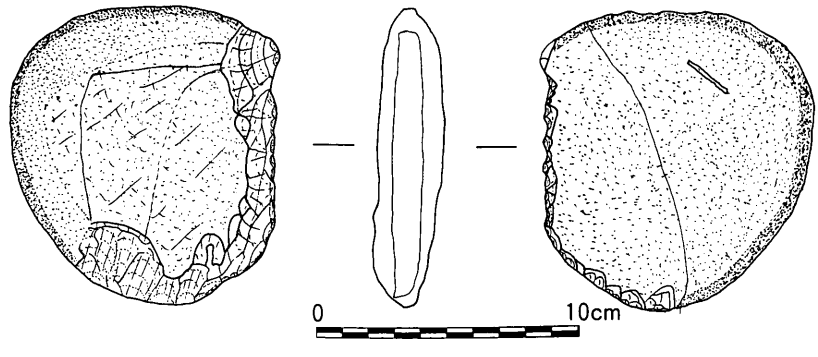
（5）は平安時代土師器破片であり、わずかにカキ目痕（拓影には不明瞭）が見られる。

第8図は第15号トレンチ内より出土した天目茶碗である。図上復元により口縁径10．2cmを測る。口唇部は若干丸味を呈し、外反し、口縁下部から胴部付近に至ってややふくらみを持つ。胴下部から鬼板（いわゆる鉄サビ釉）が認められ、大窯期の新しい方の所産と想定できる。全般的に見て、16世紀前半頃に位置づけられよう。



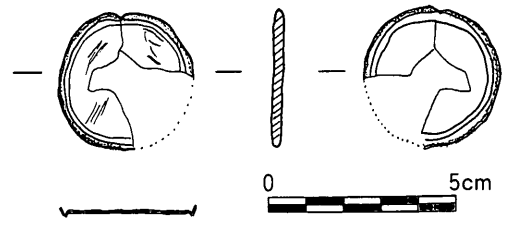
第8図　陶器実測図（1：2）

第9図は第2号トレンチ内より出土した縄文中期の硬砂岩製敲石の一種である。周縁の一方には剥離痕を、もう一方には自然面を残している。



第9図　石器実測図

第10図は第8号トレンチ内出土の青銅製金属器であり、直径3.5cm程度を測る。緑青の吹き出しは多く、実測図から見て小型円形筒形銅器の底部片と思われる。



第10図　金属器実測図

その他、縄文時代の黒曜石片、中世の内耳土器片、江戸時代の志野焼皿が出土している。（飯塚政美）

第Ⅲ章　所　　見

今回の中原遺跡発掘調査は後述する原遺跡と同様な事業導入による埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査である。この調査報告書は平成14年度内に刊行する責務があるために、充分なる時間を報告書作成にかけられなかった。

この結果として、実測図、図版を主体にしたものであり、しかも限定された範囲での発掘調査だったために、図面に関しては、不十分な状態で掲載されているのが実態であるが、御容赦を願うところである。

今回の発掘調査では中世の竪穴２基、時期不詳の柱穴群１基がそれぞれ検出され、これらについて、いわば、遺構の実態と遺物について述べることにする。中世の竪穴２基は隣接して検出され、ともに一辺が１m30cm程度から１m50cm程度、深さ30cm程度～50cm程度、平面プランは隅丸方形状を成し、極めて酷似しており、どうも同時期の所産かと思われる。これらは対岸にある「登内の城」との関連性を見逃せないわけである。

第２号竪穴より火打金と火打石がセットで出土し、このことは中世の竪穴の実態、特に、用途についてある程度把握できるのである。時期不詳の第１号柱穴群は本文中で触れてあるように、限定された範囲内での調査であったために、その実態は把めなかったが、検出された柱穴の直径、深さ、柱間の距離から総合的に見て「倉庫址」的な遺構と思われる。

その他、出土した遺物は縄文早期末葉の茅山上層式土器、縄文時代の黒曜石、縄文中期の石器、縄文後期中葉の加曽利Ｂ式土器、中世の内耳土器、天目茶碗、江戸時代の志野焼皿があり、このことによって古くは7000年位前から、途中は若干抜けるが、新しくは300年位前まで連綿として人間の営みがあったのである。　　（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺跡遠景

遺跡地を東側より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版2　発掘調査状況

第1号トレンチ

第2号トレンチ

第3号トレンチ

第4号トレンチ

第5号トレンチ

第6号トレンチ

図版3　発掘調査状況

第7号トレンチ

第8号トレンチ

第9号トレンチ

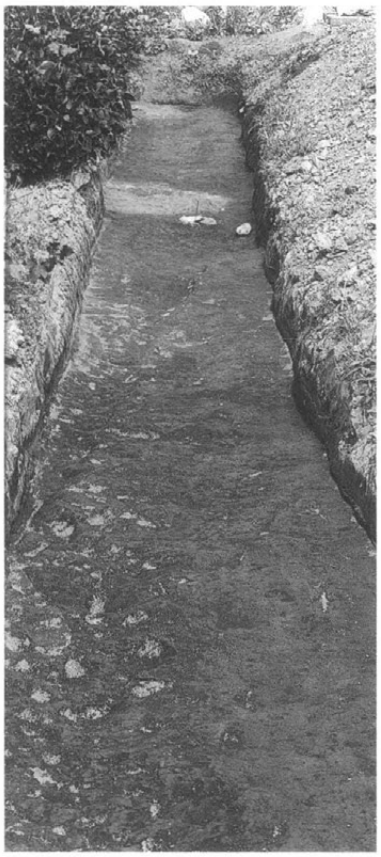
第11号トレンチ

第12号トレンチ

第13号トレンチ

図版4　発掘調査状況及び遺構

第14号トレンチ



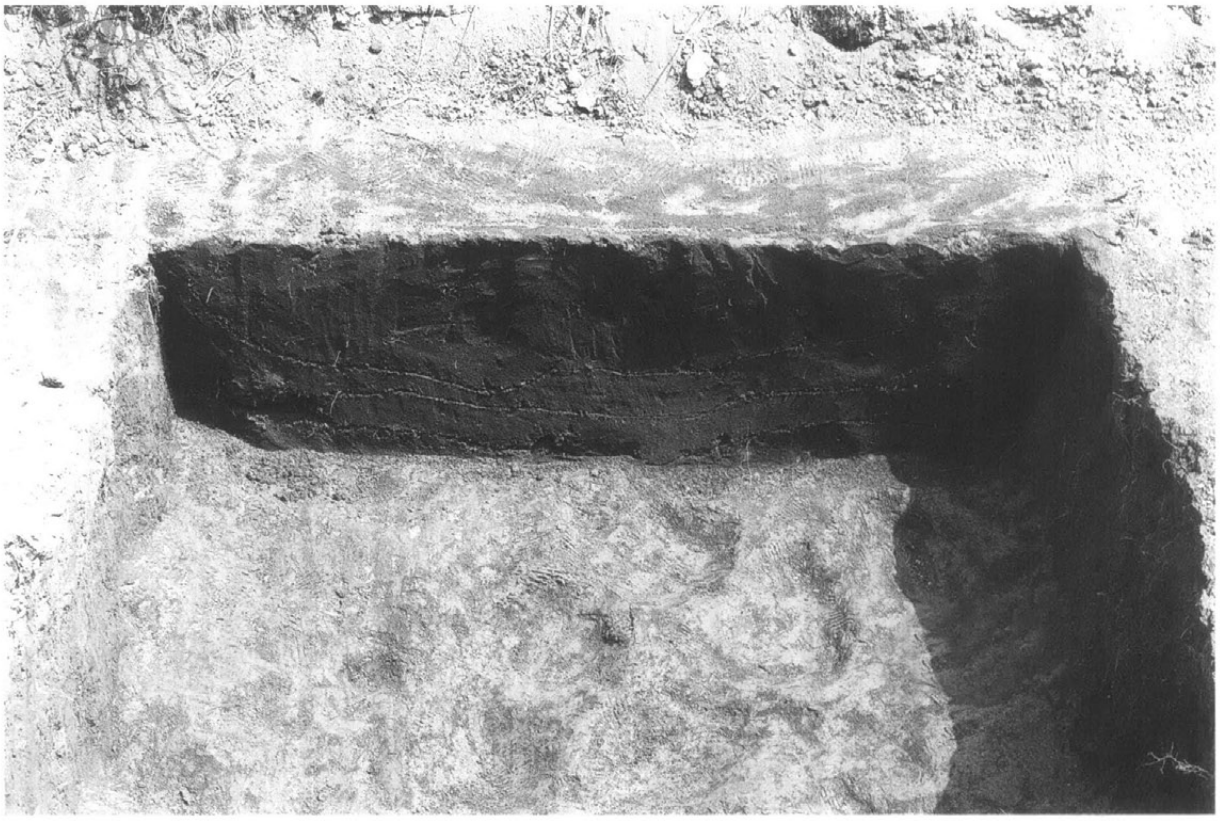
第15号トレンチ

第16号トレンチ

第17号トレンチ

第１号竪穴

図版5　遺構



第2号竪穴セクション

第2号竪穴

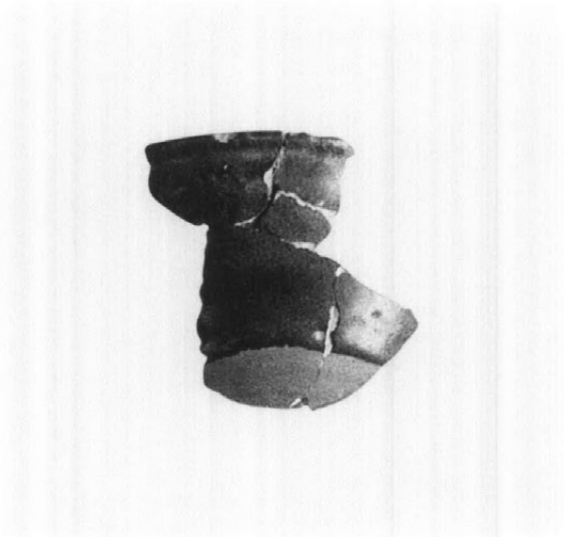
図版6　遺構及び遺物出土状況

第１号柱穴群

天目茶碗出土状況
（第15号トレンチ）

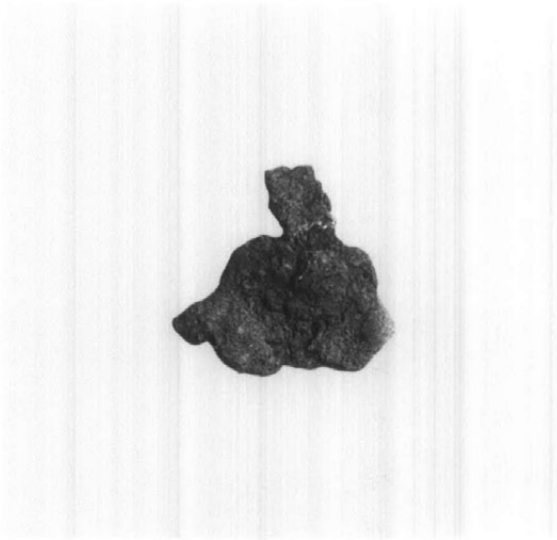
火打金出土状況
（第２号竪穴）

図版7　出土遺物

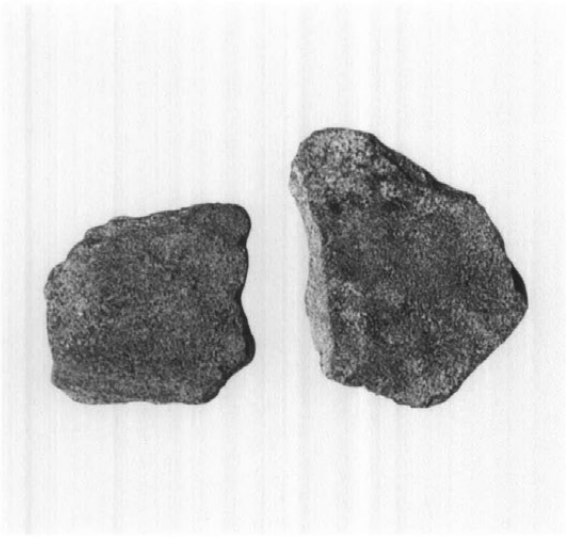


天目茶碗

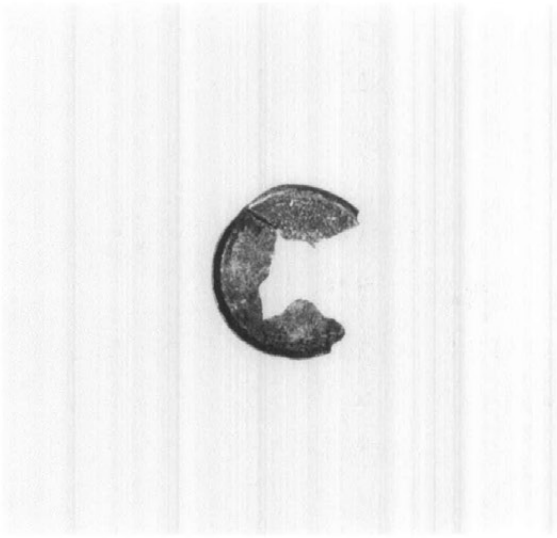
火打石



火打金



内耳土器



青銅製金属器

報告書抄録

ふりがな	なかはら
書名	中原遺跡
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
編著者名	御子柴 泰正　飯塚 政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617　長野県伊那市大字伊那部3050番地　ＴＥＬ(0265)78－4111
発行年月日	西暦2003年３月３日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中原（なかはら）	長野県伊那市手良沢岡（ながのけんいなし てらさわおか）	伊那市	156			平成14年６月21日～平成14年８月29日	2,000	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原	集落址	縄文時代 平安時代 中世 江戸時代	中世竪穴　２基 時期不詳柱穴群　１基	縄文早期土器 縄文後期土器 縄文中期石器 平安時代土師器 中世金属器 中世陶器 中世内耳土器 近世陶器	2,000㎡に達するかなり広範囲の発掘調査であったが、その展開は現道の両側に沿って帯状に伸びているため、成果は期待していた程ではなかった。発掘調査にかかる前はかって、古代に栄えた「弓良郷」の解明が期待されたが、その手掛りは何も得られなかった。一方、これによってこの郷の存在範囲がある程度限定できる結果となった。

原　遺　跡

目　次

目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……4
　第１節　発掘調査に至るまでの経緯……4
　第２節　発掘調査の組織……4
　第３節　発掘調査日誌……5

第Ⅱ章　発掘調査……6
　第１節　調査の概要……6
　第２節　遺構と遺物……6
　　（１）　時期不詳の遺構……6
　　（２）　縄文時代の遺物……7
　　（３）　弥生時代の遺物……7
　　（４）　その他の遺物……7

第Ⅲ章　所　　見……8

挿　図　目　次

第１図　地形及び遺構配置図……（袋図）
第２図　第１号集石土坑実測図……（６）
第３図　出土土器拓影……（７）

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
図版２　発掘調査状況
図版３　発掘調査状況及び遺構

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった原遺跡は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成13年11月14日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事、伊那市教育委員会社会教育課職員、上伊那地方事務所土地改良課職員とで三者協議を実施する。

平成14年６月17日付けで、上伊那地方事務所長鈴木良知と伊那市長小坂樫男両者間で委託契約書を取り交わす。

平成14年６月19日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長御子柴泰正両者間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

平成14年11月22日付けで、原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成14年11月22日付けで、原遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出する。

平成14年11月22日付けで、原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会教育長へ提出する。

平成14年12月19日付けで、上伊那地方事務所長鈴木良知と伊那市長小坂樫男両者間で変更委託契約書を締結する。

平成15年１月８日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長御子柴泰正とで埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書を締結する。

第２節　発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長	登内　孝
委員	上島武留
〃	伊藤晴夫
〃	田畑幸男
教育長	保科恭治
教育次長	伊藤　隆
事務局	塚本哲朗（生涯学習・スポーツ課長）
〃	布袋喜代子（生涯学習・スポーツ課長補佐　女性室長）

事　務　局　　白　鳥　今朝昭（生涯学習・スポーツ課長補佐　社会教育係長）
　〃　　飯　塚　政　美（生涯学習・スポーツ課主幹）
　〃　　山　口　千江美（生涯学習・スポーツ課主査）
　〃　　北　林　　太（　　〃　　）
　〃　　唐　澤　直　樹（　　〃　　）
　〃　　田　原　節　子（　　〃　　）

発掘調査団

団　　長　　御子柴　泰　正（長野県考古学会会員）
調　査　員　　飯　塚　政　美（日本考古学協会会員）
　〃　　本　田　秀　明（長野県考古学会会員）
作　業　員　　城倉三成　織井和美　酒井公土郎　有賀秀子　那須野進　松下末春
　　小田切守正（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成14年11月１日（金）　発掘現場にて発掘準備を進め、万全を期した。

平成14年11月６日（水）　発掘現場にスペースハウス･コンテナハウスを建てる。遺跡地東側の水田に東西に長く、南側から北側へ三本のトレンチを設定する。これらを第１号トレンチ、第２号トレンチ、第３号トレンチと命名して、掘り進める。

平成14年11月11日（月）　第１号トレンチ、第２号トレンチ、第３号トレンチを完全に掘り尽くし、写真撮影を終える。一段下がった西側の水田へトレンチを前の方向性に基づいて設定し、第４号トレンチ、第５号トレンチ、第６号トレンチと命名し、掘り進めていくと、土器片が出土した。

平成14年11月18日（月）　第４号トレンチ、第５号トレンチ、第６号トレンチを完掘し、それらを写真撮影する。第３号トレンチ北西隅に石を伴った土坑が検出され、これを第１号集石土坑と命名する。これを完掘し、平面、断面実測を終える。第１号トレンチ、第２号トレンチの埋め戻しを完了する。

平成14年11月19日（火）　前日に検出された第１号集石土坑の写真撮影を終える。全測図、第１号集石土坑実測図の完成。全てのトレンチの埋め戻しを終え、夕方、発掘道具、発掘機材一式を全て伊那市考古資料館へ運搬する。本日をもって発掘現場作業を終える。

平成14年12月～平成15年２月　報告書の図面、図版作成、原稿執筆、編集を終えて、印刷所へ入れて、印刷を開始し、校正を行い、３月の報告書刊行に努力を払った。

平成15年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみた。　（飯塚政美）

第Ⅱ章　発掘調査

第１節　調査の概要

原遺跡周辺は農振農用地区内の網が掛けられており、現況は大部分が水田で、今回の発掘調査対象地は水田転作として大豆が栽培されていた。さらに、転作の一環として、トマトなどの野菜類がかなり広範囲にわたって栽培され、典型的な田園風景を展開しており、手良地区内では穀倉地帯の一つに数えられている。

遺跡地の発掘調査地点は全て、水田化されており、発掘調査を行うに当たって、水田造成時の移動土の状態、ようするに、切り土と埋土の状態を十二分に調査、検討を加えて、現地に重機を入れて調査に踏み切った。実際に掘り下げてみると、原地形は平坦地であったとみえて、移動した黒土層及び遺構の掘り込み面となるテフラ層の動きは少量で、遺構検出への期待度は大いに持てた。

結果的に限定された調査地域であったが、時期不詳の集石土坑１基が、ソフトテフラ層を見事に掘り込んで構築されていた。もう少し広範囲の調査であったならば遺構の発見が増加すると思われる。詳細な成果は報告書の通りである。　（飯塚政美）

第２節　遺構と遺物

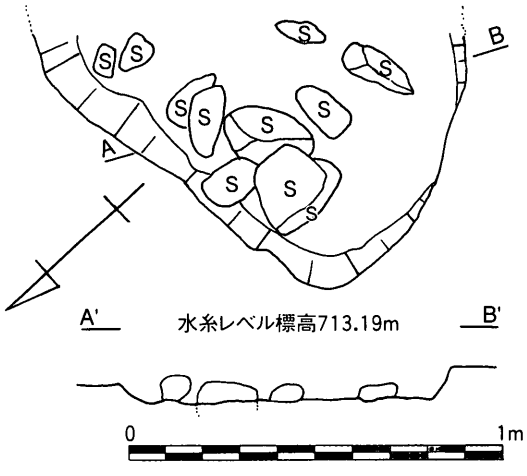
（１）時期不詳の遺構

第１号集石土坑（第２図　図版３）

本集石土坑は第３号トレンチ北西端の一角に部分的に検出された。表土面層より50cm程度下のソフトテフラ層面を掘り込んで構築した集石を有する土坑である。規模は南北・東西ともに関して、南側と東側が用地外のため、調査不能であり、したがってその数値は測定できなかった。ただ、発掘調査された西側の一隅の状態からして、平面プランは隅丸方形状を呈すると想定できる。壁高は10cm程度と極めて浅く、内湾気味を成し、軟弱で、部分的に凹凸が認められた。

床面は堅い叩き状を成しており、若干のデコボコが存在していた。床面上に敷き詰められた石は拳大から人頭大程度で、割合に集中的に配列され大部分が緑泥岩製であった。なかより遺物は何も出土しておらず、時期不詳である。

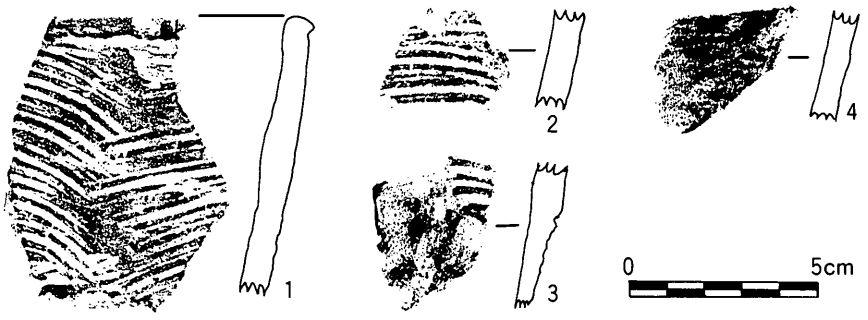
（本田秀明）



第２図　第１号集石土坑実測図

（２）縄文時代の遺物

第３図の（４）に掲載した土器片は外面に細かな斜縄文を施した縄文中期後葉の所産と想定される。赤褐色を呈し、焼成は中位で、少量の雲母、長石を含んでいる。



第３図　出土土器拓影

（３）弥生時代の遺物（第３図）

第３図の（１～３）は同一個体の破片であり、弥生時代前期後半から中期前半に隆盛する所謂、東海系の水神平式土器の新しい方に属していると思われる。外面の文様は無雑作に条痕文系風的に施している。中厚手に属し、黒茶褐色を呈し、多量の雲母、長石を含み、焼成は良好である。

（４）その他の遺物

中世の火打石、16世紀前半大窯期の天目茶碗口縁部破片、江戸時代の天目茶碗片、志野茶碗片、筒形染付茶碗片が数点出土している。　（飯塚政美）

第Ⅲ章　所　　見

原遺跡の発掘調査は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財の記録保存による緊急発掘調査である。本報告書は、平成14年度内に刊行する義務があるために、その方法・経過措置については「例言」にて前述してある。

今回の発掘調査範囲は全く新規の道路を設定するとのことで、約12m幅内の調査であった。かなりの調査範囲はあったにもかかわらず、遺構としては時期不詳の集石土坑１基のみであった。

遺物としては、縄文中期土器片、弥生前期後半から中期前半の土器片、中世後半期の天目茶碗片、江戸時代の天目茶碗片、志野焼茶碗片、筒形染付茶碗片が数点出土している。

以上の成果を踏まえて考察するに、今回の発掘調査地点はいわば散布地的な意義づけができるのであろう。遺物の中で、特に注目すべきものは、弥生前期後半から中期前半の土器。所謂、条痕文系土器類、編年で言う「水神平Ⅱ式土器」である。この土器とともに稲作農耕文化が天竜川を北上してきていることは定説になっており、この事実からみて、すでに2000年位前の手良の地で稲作農耕文化が定着されていた確固たる証拠となるのであろう。

中世後半期の天目茶碗の出土は本遺跡地より北へ八ツ手川を隔てた対岸に「登内の城」が存在しており、それと、何らかの関連があるのであろう。近世陶磁器片の出土は手良地方が江戸時代を通じて、天領の一種であった「千村預り領」によって統治されていた。千村氏代官屋敷は岐阜県可児市久々利にあり、それとの関連性より東濃産の近世陶磁器片の出土があっても極当然なことであろう。　　（飯塚政美）

図　　版

図版1　遺跡遠景

遺跡地を東側より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版2　発掘調査状況

トレンチ内の発掘風景

第1号トレンチ

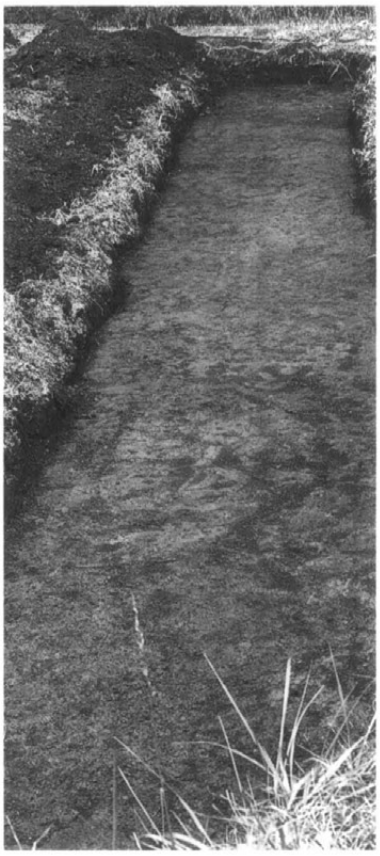
第2号トレンチ

第3号トレンチ

図版3　発掘調査状況及び遺構

第4号トレンチ

第5号トレンチ



第6号トレンチ

第1号集石土坑

報告書抄録

ふりがな	はら
書名	原遺跡
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書
編著者名	御子柴 泰正　飯塚 政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617　長野県伊那市大字伊那部3050番地　ＴＥＬ(0265)78－4111
発行年月日	西暦2003年３月３日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原（はら）	長野県伊那市（ながのけんいなし） 手良沢岡（てらさわおか）	伊那市	154			平成14年 11月１日 ～ 平成14年 11月19日	500	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原	散布地	縄文時代 弥生時代 中世 江戸時代	時期不詳集石土坑 １基	縄文中期土器 弥生前期後半～中期前半土器 中世陶器 近世陶磁器	発掘調査を実施した場所は、現道の両側に沿って帯状に伸びているため、成果は期待していた程ではなかった。発掘調査にかかる前はかって、古代に栄えた「弓良郷」の解明が期待されたが、その手掛かりは何も得られなかった。一方、これによってこの郷の存在範囲がある程度限定できる結果となった。原遺跡に隣接して中原遺跡がある。

中原・原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
（竜東地区）

―埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書―

平成15年３月１日　印　刷

平成15年３月３日　発　行

発行所　上伊那地方事務所
　　伊那市教育委員会

印刷所　長野市　ほおずき書籍㈱

第1図　地形及び遺構配置図（1：1,500）